

●聞き書き作品 2016

雨乞い踊り “あきつさいどひゃっこくおど秋津西戸百石踊り” について



●実施日

平成 29 年 (2017 年) 2 月 17 日

●語り手

針木 功さん (69 歳 : 加東市秋津/秋津西戸百石踊り保存会 会長)

●聞き手

古泉 啓悟 (20 歳 : 兵庫教育大学 3 年生) ★

宮内 俊輔 (21 歳 : 兵庫教育大学 4 年生)

雨乞い踊り“秋津西戸百石踊り”について

1. 針木さんの生いたち

生まれた時からずっと東条町（現 加東市）に住んでいます。この西戸地区さいどには28戸しかありません。

昭和20年に終戦して、父親達が戦地から引き返してきた当時は、35戸の集落でした。

私は昭和22年生まれで、西戸地区の同級生が女子1人、男子9人でした。一人だけ中学校進学の際に三田学園に行きましたけど、あとのみんなは小学校から中学校まで、遊ぶにも何をするにも、ずっと一緒でした。

それが高等学校に行くようになると不良になってきて、親に無茶を言って単車を買ってもらって走り回っていました。どの家でもそうだったと思うのですが、親が農協でお金を借りて買ってもらっていました。それで、この辺りで単車を持っているのが集まって、当時は雷族と言われていました。今で言う暴走族のようなことをしていました。警察がこの辺りに目をつけていたので、白バイが来たら蜘蛛の子を散らすように解散する。白バイに誰かが追いかけると、それを振り切ってまた集合場所に戻ってきていました。今はそんなことをする人もいないでしょうね。



2. 百石踊りについて

西戸地区は小さい地区なので、区長などの役

員は、順番制みたいなものです。

かつて西戸百石踊り保存会の会長をしていた人から、「次の会長をやってほしい。」と言われていたのですが、私より先輩が何人かいたので、しばらくは断っていました。それに、しばらく干ばつもなかったため、百石踊りの活動もしていませんでした。

ただ、私も役員になるような年齢になり、年上の先輩方も地区の役員としていろんな仕事をされていたので、区長を務めた後に西戸百石踊り保存会の会長を引き受けました。

百石踊りの記録を見てみますと、室町後期から始まっています。住吉神社の氏子が11地区あり、実際に踊っていたのは8地区で、残りの3地区は準備や世話を回っていたようです。

西戸地区だけになって以降は昭和36年に踊ったのが最後で、それ以降はどこも踊っていませんでした。何故かという、利水が良くなって、その間は干ばつがなかったからです。

あるとき、お酒の席で老人会の誰かが百石踊りの歌を歌い出して、そのときに誰かが踊ろうとしたのですが、長い間踊ってないから、誰も踊れなかったんです。そこで、皆で一生懸命思い出しながら踊り始めたのが、西戸地区で百石踊りが再興したきっかけです。それが昭和36年で、私が14歳の中学生の時でした。22年ぶりだったそうです。

百石踊りは干ばつの時にしか踊らないので、『幻の踊り、幻の舞』といわれていました。だから皆忘れてしまい、氏子だった他の地区では衰退していったのです。幸か不幸か分かりませんが、西戸地区にはたまたま踊りを知っている人が数人いて、偶然にもお酒の席で誰かが歌い、踊ろうとしたことがきっかけになって今に至ります。他の地区では今は全く踊っていません。



3. 平成6年の踊り

その時は、私は太鼓打ちをしていました。踊りが終わる頃にぼつぼつと雨が降ってきて、調子が出てきたと思っていたら、帰る頃には本降りになってきたんです。新聞社も取材に来ていまして、夜になって住吉神社に電話があったようです。「まだ降ってますか？」って。それで翌日の新聞に掲載されました。こういうのはタイミングですけど、そのときは気持ちよかったですね。二十数人で踊りますので、「やった」という喜びというか実感がありました。

あるときは、百石踊りを踊って、雨が降り続いた年もありました。大げさにいうと、洪水の一步手前にもなりました。この辺りは農業が盛んですので、雨が必要なときもあるし、必要ないときもあります。雨が降りすぎると、「百石踊りを踊ったから降った」って言われるんですね。昔は干ばつの時にだけ踊っていたので、百石踊りのせいで雨が降ったとは言われなかったのですが、今は年に1回は踊っていますので…。

毎年踊るようになったのは、今までの経験から、長い間踊らなければ、また忘れてしまうと考えたからです。今はビデオやDVDがありますけど、やっぱり生で伝えていかないと、細かいところは伝えられませんので、そういう意味も含めて毎年踊るようになりました。

それから、住吉神社の宮司さんから、お祭りの行事として参加して欲しいと依頼されていたのですが、毎年神社の行事に使われるのは嫌だという意識があって、4、5年は断っていました。でも、よく考えたら、また長い間踊らずに忘れてしまうよりも、毎年踊って残していった方が良く思うようになって、もう6、7回、毎年住吉神社で踊っています。

ただ、踊る人がだんだん高齢になってきているので、体力的に厳しいというのがあります。たとえば、女性の踊り子が12人踊るのですが、一番上の方は65歳くらいですが、1曲終わるごとに曲間は座ります。すると、次の曲が始まって立ち上がるのが大変なんです。それが6曲あるので、もう立てないと言われるんです。(笑)

体力的なこと以外にもいろんな考え方があって、わざわざ踊らなくても良いのではという声もあります。百石踊りの意義というか意味がいまいち分からない、それ以前に家の仕事があるという人もいます。

毎年4月29日が本番ですので、通常はその1ヵ月前から、踊るメンバーが変わった年には、さらにもう1ヵ月前から練習を始めます。2、3年前にメンバーが10人ほど変わった年は、だいぶ練習しました。ただ、練習に出てくるということは、家の用事を済ませる時間が減ったり遊びに行けなくなったりと個人の都合もあるので、どれだけ練習できるかはメンバー次第です。

子どもは、西戸地区の小学校2年生から6年生までが参加していて、規定はありませんが、小学生で線を引いています。高学年になると、一緒に踊っている親より大きくなる子もいて、小学校6年生までにしていきます。地元の中学生や高校生は、踊りを見に来る程度ですね。

家によっては親子で出ている家もありますし、3人出ている家もあります。踊る人は22~24人で全員が西戸地区の住民です。

住吉神社で踊った時の挨拶で、西戸地区は28戸で、踊りに参加しているのは踊り手・踊りの師範を含めて全員で36人ですので、踊りの間は西戸地区に人がいなくなって泥棒が入り放題だという話をよくするのですが、人が減って、子どもが0人になったら踊れないと諦めています。来年には2人だけになる予定で、他の地区から呼ぶことも、今のところは考えていません。

百石踊りには私が30歳くらいの時から関わっているので、今年で40年になります。もう現役は引退して太鼓の指導をしているのですが、太鼓打ちが用事で練習に来られないときには、私が太鼓を叩いています。今は会長としてまとめ役もしていますが、保存会の副会長や会計を後継者に考えています。

苦勞するのは、子どもを教えることです。それは他の人をお願いしています。その子の兄や姉が教えてくれることもあります。子どもは練習を嫌がるので大変です。

小学校でも勉強で百石踊りのことが取り上げられていると思うので、周りの見方が変わったらまた違うのでしょうか。

4. 踊りの意義

1つは、室町時代から続いた伝統を後世に引き継いで、またその若い人たちに次の世代に引き継いでいってもらうことが1つの大きな意義があると思っています。我々の先祖が一生懸命苦勞して伝えていったものを、我々が絶やすわけにはいかないと思うのです。

昭和47年3月24日には、県の重要無形民俗文化財に指定されました。それを無駄にはできない、出来るだけ上を目指して、国の重要文化財やユネスコの世界遺産に登録されたらいいなということを思っています。藤井比早之衆議院議員が来られたら、その話で盛り上がるんです。今からどうするかは、これからの話ですが。

私が会長をするのは、あと1~2年と思っています。早く辞めてもいいけませんし、あまり長

い間務めると、次の人が続かなくなりますから、難しいところです。好きでやっていると思われても困りますしね。



5. 針木さんの願い

若い人に、西戸地区に戻ってきて欲しいという気持ちはもちろんあります。声を大にして言いたいです。百石踊りの存続とは関係なしに、もっと大きな問題として。

でも、考えてみると、帰ってこいと言うのも酷な話だと思います。一旦都会で生活し始めてそこで結婚すると、田舎に帰ってくるのは大変です。私の周りでも、奥さんと子どもは都会に残して、夫だけ帰ってきた人が何人かおられます。親の世話や、田んぼの管理のために帰ってくるのです。中には離婚までして帰ってきた人もおられます。

国としても、都会から田舎へ人口を分散させたいのは分かるんです。でも、都会の方が便利なのは間違いないですからね。私ももうすぐ車を運転出来なくなると思うと、病院や買い物に行けなくなります。都会にいれば、そういう心配はないので。そういった問題を解決しないと、なかなか若い人は帰ってこないと思います。

百石踊りの踊り手については、他の地域から来て欲しいとは全く思っていません。たまたま西戸地区に生まれて、たまたま地元に残って、だんだん歳を取っていく中での百石踊りだと思っています。だから、あまり他の地区から人を呼んでまで活動することは考えていません。

何年も前に、東条東小学校の活動で、「命輝

「東条川」という冊子が作られていまして、我々もその作成の一環で、5、6年生に、昔の良かったことを伝える機会がありました。

子ども達が良いなと思ったのは、今は現実的に出来ない話ですが、当時は学校にプールがなかったのも、父兄が見守りの当番をして、子どもが川で水泳をしていたことでした。

その時は、小さな地区でしたが約 30 人の子どもが学年関係なく一緒に泳いでいました。魚を釣ったり、親の目が届かない所まで、いかだで川を上っていったりもしました。

帰るのが4時や5時になると、親が並んで川岸で待っていて怒られたりもしました。でも、のどが渇いた時には川の水を飲んだりした話をしたら、子どもが目を輝かせていました。

10年前に、その子ども達から返事をもらって、話をして良かったと思いました。

治水の関係で、ダムは絶対必要だと思います。我々は百姓ですので、干ばつの時は水が必要です。今までその恩恵を受けて良い米が取れています。

東条川は、今は下水処理がされてきれいになりましたが、それまでは排水がみんな川に流れていました。それは大阪でも東京でも同じことです。

東条湖が完成して、上流からふるけ古家地区、つねだ常田地区、西戸地区の順に秋津水路が通ったのですが、構造物なので、経年劣化してきます。それは土地改良区が修繕してくれるのですが、農地の70%は東条湖からの水が用水になっています。まさに、東条湖の水が命の水ということです。

6. 仕事のこと、日本の未来

私は昭和 41 年に東条町役場に入りました。21年ほど勤めて辞めた後、当時は景気が良かったので、友人に紹介されてベビー服を作り始めました。今になって考えると、どちらが良かったのかは分かりません。自営業で今も続けていますが、後継者は考えていません。もっと稼げ

るようなら引継ぎますが、今はもうミシンを踏む縫子さんがおりません。自動車もそうですが、日本製の製品は無くなってきて、どこの企業も人件費の安い海外へ流れています。繊維業界も含め、それが自分の首を絞めることになっています。縫子さんがいなくなることも、日本の産業が衰退していくのも、下請けが海外に工場があるからだと思います。今、日本の産業に必要な金型でさえ、日本から出て行きそうになっていますが、そうになると、いっそう産業が衰退していくと思います。

7. これからの百石踊り

百石踊りは、教えて欲しいと言われれば教えますが、積極的に他の地区に教えるつもりはありません。広めれば良いとは思いますが、室町時代から続く伝統は自分たちで守るのが文化だと思っています。でも、多くの人に見てもらいたいという思いもあります。県の文化財に指定されてからは、見に来てくれる人が増えるよう、チラシやポスターを作ってPR活動を活発に行いました。

はっきり言って、百石踊りは1回見れば、毎年見るようなものではないのは分かっているので、人を呼ぶのが一番難しいと思っています。これからの課題です。案内状はたくさん出しています。



保存会のメンバーは、踊る人と教える人で36人おりますが、だいたい私みたいに踊りは引退して教える人が、PR活動に回っています。加

東市や近隣の市に宣伝していますが、大変です。市の広報誌に掲載してもらうには、早めに作らないといけません。ポスターを作るのも、これまでのデータを見てキャッチフレーズを考えています。そういう仕事は好きなので。

住吉神社以外の場所で百石踊りを踊るという希望はあります。毎年、市の教育委員会にお願いしたり、県の文化課に登録していますので、その関係で話があったりしたら参加していたのですが、最近はその話がなくなってきました。市の教育委員会からも文化財の保護という意味で多少の補助金はもらっています。社ステラパークの催しに声がかかったこともありますし、昔は神戸文化ホールにも行きました。一番遠いところでは、富山県に行ったりと、少し前まではあちらこちらに行きましたけれど、これも流行があるのでしょうか。

8. 踊りの歌

音頭を歌っていた人が、よく覚えておられたんだと思います。音頭にしても踊りにしても、手伝え口伝えでしたので。私は、室町から始まった百石踊りと今の百石踊りは、かなり変わっていると思っています。どれほど違うかは分かりませんが、口で伝えてこられたということは、そういうことでしょうか。もちろん、今の先生方が教えているのは、ここ何年も同じやり方です。変わってくるのは、節目のときだと思います。というのは、間が空いて、久しぶりに踊ろうというときです。

百石踊りでは、4人いる心棒打ちという役の人が、踊りの全体を支配します。一番重要な役です。今からこの歌を歌いますので、みんなで踊りましょうというのがこの4人です。この一番重要な4人はひとりひとり動作が合いにくいので、そこを統一するのが一番難しいですね。私は太鼓を叩いていたので太鼓を教える専門で、心棒打ちだった人が心棒打ちの4人を教えていて、今のところはしっかりした教え手があるので変わることはないでしょうが、教え手が

変わると、ひょっとしたら踊りが変わるかも知れません。少しは変わっても構わないと思いますが。はっきり言って、人口が減っていくと、それが一番の問題でしょうね。

9. これから求めるもの

みんなが集まって、百石踊りの問題だけでなく、農業の問題の話になったときは、必ず農業の後継者の話になります。私の考えでは、このまま状況が変わらなければ20年かからずに、この辺りの田んぼが林になると思います。いかにしてそれを防いで、田んぼとして守っていくかということは、国もやっていることです。でも、やはり一番の根本的な問題は、田んぼを耕して生活出来る環境を整えることだと思います。農業は儲からなければ駄目です。それは全国どこでも同じだと思います。昔から百姓というのは、生かさず殺さずという言葉がありますが、今でもそうです。この辺りでも兼業農家ばかりで、百姓だけでは生きていけません。他の仕事で稼いできたお金を、農業に突っ込んでいような状況です。農業一本で生活している人はいません。仮にいても、他の仕事を定年までやって、以後農業をしようという人です。第一、農業では食べていけませんから。畑と水稻の両方を作って生活している人もいますけれども、少ないです。

私の希望というか、夢ですが、環境については、我々が子どもの時のような環境になったら良いと思っています。我々が子どもの時は川へ魚取りに行つて、魚を釣る針にえさを付けて、川に置いておいて、翌日には魚やうなぎが釣れているんです。東条川は改修されて、天神という所から下流は全部改修されました。ただ、その改修の方法が、私たちの思うようなものではないのです。兩岸にブロックを並べて、水の流れが一番良いものなのですが、木の根や竹の根もなく、魚の住み着きにくい環境になっています。琵琶湖で言うと、葦が水をきれいにしてくれる作用があるというのですが、その様なもの

もない。費用がかかるかも知れませんが、もし残っている河川を改修するのであれば、自然にも優しい改修をして欲しいと思います。ほ場整備のおかげで、田んぼは 30 アールがひとつの目安になり、大きな機械が入りやすくなりました。利水も良くなったのですが、コンクリート製品で水路を作りますので、魚が住めなくなっています。良いところでもありますし、悪いところでもあります。昔は魚を釣ったり、魚が潜んでいそうな所に手を突っ込んで魚を掴めたりできました。夜には、蛍が顔に当たるほどそこから中に飛び回っているような、そんな農業が出来るのが夢です。時代と逆行しているかも知れませんが。

私の信念の 1 つは、東条川がありますよね、人間というのは、生活するために、何より水が必要です。古来、水があるところに人間が集まってきたと思うのですが、一級河川の水は国のものといわれ、大川瀬ダムを作って阪神間に水を送っています。我々から言わせれば、その水は我々の東条川に流れるべき水だと思うのです。水が欲しいのなら、こちらの水のあるところへ来れば良いのではないのでしょうか。それが昔からの営みですからね。それを一部の人の都合の良いようにしているように思います。

東条川の恵みを再確認し、その素晴らしさを再発見したいと思っています。